

県立神戸北高等学校淡河校舎（元県立有馬高等学校淡河分校）に関する記録

令和2年(2020年)2月
兵庫県立神戸北高等学校
校長 長澤 和弥

戦後間もなく混乱が残る中、私財を投じてまで(県立有馬高校)淡河分校を設立された方々、淡河分校の存続や独立実現に尽力されながら、「苦い体験を言い尽せないほど」経験された最後の分校長／校舎長の松下勝之先生、そして、県立神戸北高校に統合されたことを喜びながら、一度の交流も実現せず、一種寂しく無念な思いを抱いて「淡河校舎」を卒業していった150名ばかりの女生徒たち、これらの方々の気持ちを知ったことから、兵庫県立神戸北高等学校淡河校舎の存在とその最後の姿、また、それに携わった人々の思いを後世に伝えることは、私の責務であると考え、この記録を作った。

1 兵庫県立有馬高等学校 淡河分校時代

「兵庫県立有馬高等学校 創立110周年記念誌」(平成18年10月21日刊行)より抜粋
《文言と日付の一部を当方で修正／追加した。「注:」2箇所は長澤による》

● 所在

美囊郡淡河村萩原(当初は淡河中学校内)

美囊郡淡河村淡河(新校舎)注:最後の校地

● 歴代分校主任／分校長

昭和23(1948)年10月～昭和48(1973)年3月

飯野 正規、楠 巖、松下 勝之

● 沿革

1948(昭和23)年

10月11日 美囊郡淡河村立淡河中学校に併置。
飯野正規初代分校主任の着任は翌年4月15日。

10月25日 開校。

1949(昭和24)年

5月18日 育友会結成。

5月21日 生徒会結成。

1950(昭和25)年

4月20日 農業クラブと家庭クラブの結成。

1951(昭和26)年

4月10日 淡河小学校の一部教室及び淡河村公民館を借用。

1952(昭和27)年

4月5日 淡河分校の独立校舎落成式。

1953(昭和28)年

4月11日 短期産業教育講座開講。

1955(昭和30)年 2月22日	短期産業教育講座閉講。
1958(昭和33)年 2月1日	淡河村が神戸市に編入され、神戸市兵庫区淡河町となる。
1962(昭和37)年 4月1日	本校南校舎本館を淡河分校校舎に解体移築。
1963(昭和38)年 5月28日	西に淡河城を望む旧神戸市立淡河中学校跡にて新校舎の起工式。
1964(昭和39)年 4月8日	新校舎(注:最後の校地)に移転。
5月16日	新校舎落成式。*本校南校舎本館を移築、分校校舎として落成。
1967(昭和42)年 4月1日	昼間定時制課程農業科から全日制課程農業科に移行。
1968(昭和43)年 4月1日	農業科を廃止。家政科を設置。
12月25日	神戸市により分校校地買収を受ける。
1970(昭和45)年 3月	農業科最後の生徒が卒業。
1973(昭和48)年 4月1日	県立神戸北高校設置にともない、淡河校舎として統合される。
1974(昭和49)年 2月25日	第1回 県立神戸北高等学校 淡河校舎 卒業証書授与式を挙げる。
1975(昭和50)年 2月25日	第2回 県立神戸北高等学校 淡河校舎 卒業証書授与式を挙げる。
3月11日	県会議員等参列のうえ、淡河校舎閉舎式を挙げる。
3月31日	淡河校舎閉舎。分校校地隅に記念碑を建立。

淡河分校も借家住まいのスタートであり、「生徒達は…田植や稲刈作業をしてその労賃を村会にさし出し…村長…村会議長の尽力により村有の山林材を売却して五百万の資金を得て県下初の独立校舎が」(旧職員河本泰信先生)建った。分校の維持のため職員が個人の田地を抵当に入れて金銭の工面をする(聞き取り)などの大変な努力があり、「淡河の各地では分校の卒業生が地域の重鎮として活躍し淡河特産の花弁栽培に名声を挙げる」などの活躍をしてきた。しかし1973(S48)年、神戸北高校設置にともない、淡河校舎として統合されることとなった。清陵会淡河支部若草部会の名簿に「私達の終局の目的は、独立の学校です。過去に於いて夢であったことは、今では、夢ではなくなりつつあります」と、松下分校長が書かれた3年後のことであった。看護衛生科を設置し生き残りを模索されたようだが、町内に実習病院がないなどの悪条件も重なり、実現しなかった(聞き取り)。

【学び舎がなくなるということ】

1971(S46)年4月8日に有馬高校生として入学した生徒は、三年次に「第1回北高祭」(文化祭)を催し、第1回神戸北高校(淡河校舎)卒業生(81人)となった。卒業アルバムの表紙は神戸北高校校章、内には有馬高校の制服を着た生徒たちが写る。編集後記を抜粋しておこう。

私達の懐かしい学舎が私達が去って間なく消えるこの事実…そうではない長年希っていた独立が実現したのだと思ひ返そうとする足許から冷たい風がスーツと吹き抜けて行く。そして幾年月学び友と談らい若い血潮をたぎらしたこの学舎が胸にジーンと込み上げて来る。

…巣立ち行く私達は今度こそ私達の学舎がいついつまでも永劫に栄え、大きく繁り実ってくれることを、まだ見ぬ学舎に心から祈ると共に尋ね行くであろう私達を温かいお心でお迎え下さい。

編集委員一同

淡河校舎閉舎にあたり、分校校地隅に記念碑が建立された。石碑には坂井時忠県知事揮毫になる「淡河分校跡記念碑」、傍らの記念碑には「昭和五十年乙卯歳 同窓生一同 松下勝之文」、末尾を掲載する。

斯ノ如キ外辺ノ激変ハ当該地ニ新タニ高等学校設置ノ声頻リナル觀ル
此処ニ是レト合シテ当校の新タナル飛躍ヲ欲セリ
時ニ昭和四十八年機熟スル処トナリ当校ハ新タニ設置セラレシ兵庫県立神戸北高等学校ト合シ永遠ニ継承セラル茲ニ当校ノ光輝アル歴史ヲ閉スルニアタリ其ノ概要ヲ刻シ記念トス矣

神戸北高等学校創立 10 周年にあたり、記念誌に元淡河校舎長松下勝之先生が寄稿された。

県下の定時制分校が開校されまして、30 余年になります。その年月の中で、これ等のほとんどの分校は進展する時代と逆に、惨めな終末を辿っております。これも、敗戦後の教育の民主化に翻弄（ほんろう）された哀れな犠牲者だったと私は思っております。淡河分校も又、その一つでしょう。しかし、それでも最終時、家政科 2 学級が存続していました。が踏み止まらず、県教育委員会のこの際、新設校への一本化こそ分校の新しい道と、執拗な説得（失礼な言葉をお許し下さい）に応え合併したのです。しかし事實は違っていたようです。それは、開校式に代表として式に参列しました 36 名の生徒が、予想だにできなかった霹靂（へきれき）にも似た惨めさを味ったことでした。それから 10 年が流れました。ただ思いますことは、そのような彼女等がそれぞれ卒業に当り、母校への思慕の念をこめて運動場の周辺に、玄関脇にと、ポプラ苗木と黄楊（つげ）の木を贈って出ましたが、さぞ、すくすくと生い育っていることでしょう。何時の日か、母校を尋ねる彼女等の縁（よすが）に大切にこれからも育ててやって下さい。

校舎はその後、県立淡河スポーツ研修センター、長松寺スポーツ市民公園などを経て現在は民間の高齢者福祉施設となっている。

2 「淡河分校跡記念碑」の碑文

《最後の校地の片隅に今も建つ石碑に刻まれた文言を長澤が文字起こした》

當校ハ未曾有ノ敗戦ニヨリ其ノ戦禍ハ全土ニ及ヒ其ノ被害慘状ハ言語ニ絶シ郷土モ亦積年ノ疲弊ニ困憊シ荒寥タル慘状ヲ呈セリ

当時村政ノ要路ニアリシ先輩諸兄ハ齊シク荒廢セル郷土ノ復興ハ将ニ青年ノ力ニ俟ツヲ慮リ先ツ以テ在郷青年ノ教育ノ急務ナルヲ覺ル

時恰モ施行セラレシ新教育法ニ基キ昭和二十四年兵庫県立有馬高等学校淡河分校トシテ当地ニ設置セラレタリ爾來二十有七年ヲ閲シ幾多ノ試練ニ耐エ困難ヲ克服シ以テ只管斯道ノ振興ニ努メタリ

其ノ間にアツテ当校ヲ巢立チシ者千余ヲ算ス

皆齊シク其ノ所ヲ得以テ社会ニ貢献シアルヲ觀ル

然リト雖モ時代ノ進展ハ目覺シク特ニ外辺ノ開發發展ハ著シク今日新タニ一大都邑ヲ形セリ斯ノ如キ外辺ノ激變ハ当該地ニ新タニ高等学校設置ノ声頻リナル觀ル

此処ニ是レト合シテ当校の新ナル飛躍ヲ欲セリ

時ニ昭和四十八年機熟スル処トナリ当校ハ新タニ設置セラレシ兵庫県立神戸北高等学校ト合シ永遠ニ繼承セラル茲ニ当校ノ光輝アル歴史ヲ閉スルニアタリ其ノ概要ヲ刻シ記念トス矣

昭和五十年乙卯歳 同窓生一同

松下勝之文

3 「淡河校舎のあれこれ」 元淡河校舎長 松下 勝之

「校舎竣工記念誌」（昭和50年10月1日刊行）より《原文のまま》

先づ以って、施設のご完成を、心からお祝い申し上げます。

さて、「淡河について書け」とのことだったので、既に静かに幕が降ろされた後で、殊更ら取り立てて、申し上げることはありませんが、それではお答えになりませんので、下手な愚感を、書かせて頂くことにしました。既に、ご承知の方も多いかと、思いますが、淡河校舎は初め、兵庫県立有馬高等学校淡河分校と、申しました。昭和二十三年に誕生しました。昭和四十三年に家庭科^{*1}に転じております。極く最初の滑り出しは、生徒数は二十三名で、男子七名、女子十六名となっています。当初から女性が多く、その後も女性の多いのが特色でした。特色と言え、設置を、地元が要望したと言うことで、施設、設備一切は、地元の無償、無期の貸与で、県は一切、無関係、無干渉とされています。最終に受けた地元の双肩に総てがかかる羽目に仕組まれています。結局、最終への皺寄せと言うことですね。まだまだ、敗戦の痛手を諸に被っていた時代ですから、例へ小規模でも分校を全国隅隅まで普及徹底させようとするれば、こうするよりなかったでしょう。然し、これが其後分校の大きな致命傷となりました。これも一概には言えません。やっぱり、地元の力関係が大きく左右しているよ

うです。でも、この条件が分校の施設、設備を全く固定したことは事実です。いずれにしても、分校を丸抱えのような形では地元の大きな負担ですからね。例へばりに、地元から犠牲を強いられたことがあったとしても、当然だったでしょう。ですから、世の中が次第に好くなり、一般も豊かになればこんな中途半端な施設は無用になり、煩わしくなるのは当然でしょうね。然し、分校としては随分酷いことのように思います。私も分校在職中、この種の苦い体験は言い尽せない程しました。結局、開校^{*2}までの二十七年間は、開校僅かにして早くも坐折感に付き纏はれ、其後幾度も存廃の岐路をさ迷い、求めざる運命に翻弄され、不遇に終始したと言えましょう。淡河が最後に統合を選んだのも、惨めな体験から得た執念のようなものかもしれません。私達は長年にわたり「分校運営の正常化」を訴え続けました。然し、頑として取入れられず、結局、全て徒労に終わりました。後は独立か、統合か、自滅以外にありません。勿論、独立へ懸命の努力がなされました。然し、独立を妨げる牢固な障壁に阻ばまれ、止むなく統合へ慎重に摸索しはじめた時偶然、当時の校長から「同地区に新校が誕生する。新校と統合しては、共に手をたずさえ出発する好機」と誘われました。余り突然だったので地元も随分迷いました。然し、最後に直接県の熱心な勧めがあり統合と決まりました。紆余曲折はありましたが、自から選んだ道でした。一五〇余名の生徒達もこの統合を歓び、新校を私達の学校として、その誕生を心から祝い、大きな喜びと期待を寄せ万感の思いをこめて、開校の日を待ち焦がれていたようです。然し、開校後は、色々な事情から、校舎は別でした。淡河に残留した生徒達は有野の仮校舎については、最初から不自由を忍ぶ、後輩達を気遣い、自分達については様々な思い出をひめた懐しの校舎ではあるが既に、淡河分校は消え、これも仮りの校舎、むしろ、共に学ばれない孤独と、悲しみをジーンと堪え、かなえられないことを知りつつ、共に学ぶ日を最後まで、願い続けていたようです。やがて、これら一五〇余名も一回、二回に分かれ、池内校長先生手ずからの卒業証書をしっかりと胸に抱き締め、母校の歴史の驍頭を飾る栄誉を得た幸せを喜び、感謝しながら誇らかに巣立って行きました。

唯、最後まで両校舎に分かれ、遠距離、交通不便といった制約を理由に、在校生諸君との交歓もならず、相互理解も図れないまま、相互に違和感が生れ、まるで、異質の者のように終らせたのではと心底後悔しています。淡河の彼女達は諸君を片時も忘れていなかったようです。そして貴君達と肌で感じあえるような温かい交流を最後まで願っていました。私が今一番、彼女達に気毒に思い、強く責任を感じていますことは、何れ最つと、細やかな配慮と努力をしてやれなかったか、であります。

色々申しましたが、私はいずれの年か、彼女達が貴君達と共に手をたずさえ母校^{*3}に貢献される日のあることを心から祈っています。彼女達は今も母校に想いを寄せ、何時の日か何処かの職場で巣立たれた貴君達と巡り合える日を楽しみにしています。この拙い私の文章が今一度後輩諸君の心の中にこのような先輩がいたことを呼び起して頂き、深いご理解を頂ける一助ともなればと祈っております。長々有難うございました。最後に、御校の益々ご発展あらんことを、ご関係各位のご多幸をお祈りしつつ筆を置きます。

*1 「家政科」の間違いか？

*2 「閉校」の間違いか？

*3 神戸北高校のこと。

4 「輝かしい10周年に際して」 元淡河校舎長 松下 勝之

「創立10周年記念誌」（昭和57年10月8日刊行）より《原文のまま》

輝かしい10周年を迎えられ、祝着に存じます。この記念すべき機会に是非、ご関係各位に深いご理解を頂き、温かい皆様のお手を、お延ばし頂ければとお願いいたしております。

10年を迎えられまして、毎年多くの生徒が巣立たれたわけですが、御校を真っ先に巣立って参りました150名の、元有馬高等学校淡河分校からの卒業生がおりましたことを、十分ご理解いただいで下さる方は極くまれかと存じます。

県下の定時制分校が開校されまして、30余年になります。その歳月の中で、これ等のほとんどの分校は進展する時代と逆に、惨めな終末を辿っております。これも、敗戦後の教育の民主化に翻弄（ほんろう）された哀れな犠牲者だったと私は思っております。淡河分校も又、その一つでしょう。しかし、それでも最終時、家政科2学級が存続していました。が踏み止まれず、県教育委員会のこの際、新設校への一本化こそ分校の新しい道と、執拗な説得（失礼な言葉をお許し下さい）に応え合併したのです。しかし事実は違っていたようです。それは、開校式に代表として式に参列しました36名の生徒が、予想だにできなかった霹靂（へきれき）にも似た惨めさを味ったことでした。それから10年が流れました。ただ思いますことは、そのような彼女等がそれぞれ卒業に当り、母校への思慕の念をこめて運動場の周辺に、玄関脇にと、ポプラ苗木と黄楊（つげ）の木を贈って出ましたが、さぞ、すくすくと生い育っていることでしょう。何時の日か、母校を尋ねる彼女等の縁（よすが）に大切にこれからも育ててやって下さい。

最後に、御校の益々のご発展と、職員の皆様のご多幸をお祈り申し上げます。多謝。

- 「開校式に代表として式に参列した36名の生徒が、予想だにできなかった霹靂（へきれき）にも似た惨めさ」とは、一体どんな出来事であったのか、今となっては知る由もありませんが、余程強烈な出来事だったのでしょう。
- 昭和48年度と49年度の2回の淡河校舎卒業生が贈ってくださったポプラとツゲのことを始め、この資料で語りきれないことや写真については、神戸北高校のウェブサイトや、「北高ブログ」をご参照ください。

（長澤）